

ハサン・アスカリーとマントー

萩 田 博

ムハンマド・ハサン・アスカリーとサアーダット・ハサン・マントーは、前者が主として批評家として活動し、後者は短編小説家として活動した違いはあるものの、彼ら2人の文学観には共通点が多く見うけられる。また、彼らが進歩主義文学運動に対してとった立場は、この運動の持った意味を考察するにあたり、非常に重要であると思われる。

ムハンマド・ハサン・アスカリー Muḥammad Ḥasan 'Askari は1919年に生まれた。アラハバード大学で英文学の修士号を取得した後、彼はデリーへ移り、文芸雑誌『Sāqī』の編集にたずさわようになる。彼はこの時期まで、主として短編小説を執筆していたが、従来のウルドゥー文芸批評に不満を抱いたことが契機となり、評論活動に重点を置くようになった。1944年の1月号から『Sāqī』誌上に連載された『Jhalkiyān』は、アスカリーの西洋文学に関する該博な知識を駆使した文芸批評、及び西洋文芸理論紹介の重要性と共に、進歩主義文学運動への批判的立場がその評論中に明確に提出されていることによって論議をかもした。彼はイン・パ分離独立後、ラーホールに移住し、さらに1950年からはカラーチャーに移り、文芸雑誌『Māh-e nau』の編集にたずさわった後、Islamia Collegeで教鞭をとることになった。そしてその傍ら、文芸批評活動を行なってゆき、1978年に没した。彼の主著としては、短編小説集『Jazirē』、『Qiyāmat hamrakāb āē na āē』、評論集『Jhalkiyān』、『Insān aur ādmi』、『Sitāra yā bādībān』、『Waqt ki rāgni』、『Jadidiyat』などがある。

さてここで、マントーとアスカリーの私的交友関係について、若干触れておきたい。彼らが初めて出会ったのは1941年のことであり、当時はマントーの強烈な個性のためもあってか、アスカリーは彼を敬遠していた。二人が個人的に親交を深めることになるのは、イン・パ分離独立後のラーホールでのことであり、マントーの短編小説『Bābū Gōpīnāth』に感銘を受けたアスカリーが、マントーの許を訪れ、以後半年余りにわたって、毎晩3、4時間をマントーと共に文学論議を交わす日々が続いた。また、この時間に二人は『Urdū adab』という雑誌を共同で編集、発行している。後に取り上げるマントーの短編集『Siyāh ḥashiyē』の

序文をアスカリーが書いたのも、丁度この時期にあたっている。さて、このように二人を急速に接近させたのは、二人の文学観に共通するものがあったためであるが、その文学観を考察する上で重要なのは二人の進歩主義文学運動に対してとった位相である。ここでは主として『Siyāh ḥāshiyē』を巡って起きた進歩主義文学運動指導部とマントー、アスカリーの対立に焦点をあてて、この問題を考えてみたい。

さて、『Siyāh ḥāshiyē』を巡る論議について言及する前に、それまで、二人が進歩主義文学運動とどのような位相で関わってきたかについて述べておくことにする。

1930年代中葉に創始された進歩主義文学運動は、その初期には多数の文学者の連帯を重視するという、指導部（サッジャード・ザヒールを中心とするグループ）の方針に沿って、反帝・反植民地主義を運動のスローガンとして掲げてはいたが、そうした政治主義的立場から、作家の創作活動に干渉することはなかった。しかし、1937～38年にかけて、アフマド・アリーとムルク・ラージ・アーナンドの間で起きたプロレタリア文学論争とそれに続くアフマド・アリーの運動からの離脱はこの時期以降の進歩主義文学運動の行方を暗示するものであった。何故なら、これは指導部内でプロレタリアートや農民を扱った文学が進歩主義文学であるとの理念が支配的になったことを意味するからである。こうした動きの中で指導部がマントーの作品について直接言及していることで注目されるのは、1945年にハイダラーバードで開催されたウルドゥー文学者の進歩主義作家会議でのサッジャード・ザヒールの議長演説である。この中で彼はマントーの作品を進歩主義的なものと反動的なものに分類し、後者の例として「Bū」を挙げている。この会議では猥褻文学批難決議もなされているが、これは反進歩主義派からの攻撃をかわす意味合いも含まれていたが、それと同時にプロレタリア文学理論の論理が行使されていたことも窺えるのである。マントーはこうした動向に対し、自らと運動との間に一線を画し、『Manṭō ke afsānē』の序文に見られるように、〈進歩主義〉という概念に疑義を呈し、この運動を揶揄するにとどまっていた。一方ハサン・アスカリーはこの時期、人間の心的過程に対する軽視などを主たる論拠として、進歩主義文学運動批判を「Jhalkiyān」で展開していった。

次に『Siyāh ḥāshiyē』を巡っておきた論議について触れてみたい。進歩主義文学運動指導部とマントーの対立を決定的なものにすることになったこの論議の経緯については、マントーの短編集『Chughd』の序文に詳しく述べられている。

この中でマントーは、運動指導部が『Siyāh ḥaṣhiyē』の序文をアスカリーが執筆したことに反撥し、その理由だけで、彼を反動主義的作家として批難するようになったと述べている。この当時、アスカリーは「Jhalkiyān」で進歩主義文学運動批判とともに、共産党批判も行ない、特にサッジャード・ザヒールらに対する攻撃はかなり激しいものであった。このためもあって、マントーがアスカリーと接触し、さらには自らの短編集の序文をアスカリーに依頼したことは、党派性の論理を持つ進歩主義文学運動指導部にとってはマントーの運動からの離脱を意味することであった。こうした動きに対するマントーの反応は1952年に出版された短編集『Yazid』に収録された「Jaib-e kafan」という題名の随筆で述べられている。この中でマントーは主として分離独立後のパーキスターンでのこの運動の動向について言及し、指導部がパーキスターンの現状を深く洞察することなく、ソヴィエト製の文学理論、文芸政策を無原則的に受け入れた過程を批判している。マントーはこの随筆中、自らの文学観を進歩主義文学運動の理念との対比から明確に述べるという作業は行なっていないが、その作業は『Siyāh ḥaṣhiyē』の序文でアスカリーが展開しているのである。

さて次にアスカリーの「序文」について検討することにした。彼は「序文」で進歩主義文学について、次のように述べている。“大抵の新しい文学（註：進歩主義文学を指している）の創作動機には内的な欲求が欠如していた。……これは単に外的環境を変革させることによって人間の内的生活が変革されうるといふ、当世流行の信仰の下におこったと言えよう。”¹⁾ この引用からも明らかなようにアスカリーは進歩主義文学には政治・社会・経済といった外的状況の反映が顕著に見られるが人間の内面についての追求が欠如していると考えた。こうした観点から、彼は動乱文学の基調をなしていたヒューマニズムに対しては作家の自己欺瞞を指摘している。“動乱について執筆する者は世界中の事柄について真実を語っているのかも知れないが、自分については語らないのである。彼らは我々が自らの持つ自然的性向や偏見を隠蔽するようにと最大限の努力を払うのである。しかし、これ程激烈な騒乱の時代にあって、こうした偏見が露呈してくるのは当然のことである。もし、これらの人々が自分の小説に本当に或る人間的意味を生まれさせたいのであれば、まず最初に彼らは自分の人間的欠点を告白せねばならないだろう。自分の内部に満ちている虚と実を無視しては真の文学は生じ得ないのである。”²⁾

このように、アスカリーは動乱文学の多くの作品について、作家の自己省察の

不足やヒューマンイズムの観点に立った意図的な創作姿勢を批判しているが、これは動乱文学が内包していた本質的な欠陥を鋭く指摘した見解と言えるだろう。一方、彼は『Siyāh ḥāshiyē』中の短編について、マントーが善・悪や政治・社会問題に拘泥せず、動乱の中での人間心理を描出している点を評価している。

アスカリーの短編集『Jazirē』に収められている「あとがき」は1943年に執筆されたものだが、この「あとがき」は以後の彼の文学観を構成する基本的モチーフが殆んどあらわれているという点で重要な意義を持っている。この中で彼は20世紀西洋文学の中心的主題として〈孤独〉と〈変化〉の2つをあげている。そしてこの主題が出現した原因を、彼は物質主義の蔓延と倫理的規範の崩壊に帰着させている。こうした西洋文学の思想的課題が、インド中産階級の課題にもなったと考えたアスカリーは『Jarirē』中の作品でそうした問題をとりあげている。「あとがき」で彼は自分と同じ課題を追求している作家としてマントーの名をあげている。これはマントーが進歩主義文学運動と一線を画し、〈性〉や〈人間心理〉を追求する創作姿勢に、アスカリーが自らと同質のものを看取したためであると考えられる。アスカリーは進歩主義文学運動の創始期にはこの運動の支持者であったが、以後一貫してこの運動を批判していったのであるが、それは「あとがき」で見られるように、彼が〈孤独〉や〈変化〉という主題の追求を第一義的な課題としてとらえていたため、進歩主義文学運動の展開過程で次第に露呈していった「政治と文学」、「文学の社会的効用」を巡る同運動の理念が、文学の主要課題からの逸脱として把握されたからであった。

一方、マントーはアスカリーのような体系的思想を持って進歩主義文学運動を批判することはなかったが、彼の文学的営為の成果がこの運動の理念に対する反措定となっていると言えるだろう。

1) Siyāh ḥāshiyē, Lahore, Al-bayān, n. d., p. 7.

2) ibid., p. 10.